

進捗状況の概要 ※得られたアウトカムを含む構想の実現の観点から記載すること【1ページ】

千葉大学は、「グローバル千葉大学の新生」のもと、「4つの改革」+「3つの力の育成」+「4つの独自目標」でスーパーグローバル大学創成支援事業を推進している。中でも6年間における「4つの改革」の成果は目覚ましく、以下のようにまとめることができる。

■4つの改革(ガバナンス・学修制度・プログラム・ネットワーク)による大学の新生

(1)ガバナンス改革による新生 平成28年度4月に、文理混合教育を目指した国立大学初となる「国際教養学部」を設置、令和2年4月には全国初となる研究科等連携課程の新たな類型のシステムを利用した大学院修士課程「総合国際学位プログラム」を設置した。この2つは、千葉大学を変革するための新たな試みであり、未来のグローバル人材育成になくてはならない新たな学問を学べる学部及び大学院である。今後、この2つをモデルに、学部及び大学院の全ての課程を学位プログラム化し、常に新たな学問を学ぶプログラムを設置し続ける大学となるように今後4-5年かけて大学全体を新生させていく。

(2)学修制度改革による新生 国際教養学部で実施した全員留学により、グローバル・プログラムに積極的な学生が多く入学しており、複数回留学をした学生は全体の33%以上を占めるなど、複数回の留学を実施している。最高で4年間のうち長期・短期を含めて5回の留学を経験した学生もいた。この成果は、大学が予想していたものより遥かに大きく、全員留学は入学する学生が「グローバルは必然」と考えている学生に変革しており、新たな大学の未来を切り開くものである。そのため千葉大学では、令和2年度以降に入学する学生を対象に全員留学を実施する。この計画は、ENGINEプラン(Enhanced Network for Global Innovative Education Plan)と名付け、学部及び大学院の両方で学生全員に留学を課すものである(グッドプラクティス参照)。これにより年間4,000人の留学と、3つの海外キャンパスの利用を促進する。

(3)プログラム改革による新生 千葉大学では、多様な学びのために専門領域を横断的に学習することを可能にした、ダブル・ディグリーやダブル・メジャーの構築を目指している。その一環として、現在学部レベルで3つ、大学院レベルとして6つの副専攻(マイナー)を設置している。学部における3副専攻は、「国際日本学」「地方創生学」「数理・データサイエンス」である。副専攻の学位を取得するためには、各プログラムが開講する授業から30単位を取得する。学生は全員入学後に、すべてのプログラムを部分的に体験することになっている。これは、3プログラムごとに1-3科目が必修となっており、プログラムごとに2-3単位を取得するからである。一方、大学院における副専攻は、大学院国際実践プログラムとして、植物デザイン、大陸間デザイン教育、ツイン型学生派遣などの7つのプログラムがある。

(4)グローバル・ネットワーク改革による新生 大学間交流協定の協定校の数は現在500を超えている。これらの中で学生交流協定を持つものが300を超えており、学生を派遣する体制は十分に整った。海外キャンパスは現在3つで、バンコク、ベルリン、サンディエゴにある。これ以外にも14の海外事務所や連携オフィスがあり、学生の派遣・受入を支援している。海外の大学とのダブル・ディグリーのプログラムは36、大学院において英語だけで修了できるプログラムは40となっている。また、採択された5つの世界展開力強化事業を本事業と連携して推進している。これにより、メキシコやパナマ、ロシアなどのこれまで緊密な連携が取れていなかった国とのネットワークが確立され、本事業において十分に活用している。

■3つの力(「俯瞰力」「発見力」「実践力」)の育成

千葉大学では、人間力を身につけるため「俯瞰力」「発見力」「実践力」の3つの力を育成するプログラムを構築している。全学でアクティブ・ラーニング化を推進し、6つの類型に分類して人間力を身につける学習を提供している。

「俯瞰力」 グローバル教育とリージョナル教育の両方を必修化し、多様な視点で学習することで俯瞰力を育成

俯瞰力育成に必要なスキル形成科目を実施 アカデミック・リーディング/アカデミック・ライティング

「発見力」 PBL型の教育を1年次より複数回実施し、問題発見能力を育成 イノベーション・デザイン教育で表現

異なる学部間での実践共同学習 医薬看共同学習をモデルにしたプロフェッショナル教育を水平展開

「実践力」 ソーシャルラーニングを推進し、将来的には必修化を予定

専門的なグローバルインターンシップ、グローバルボランティアで実践学習

以上のように、3つの力を育成するプログラムを実施している。

■千葉大学を新生する4つの独自目標「753+1(シチゴサン タス イチ)計画」

「7」700科目に及ぶ英語による授業を増加し全学で実施 現時点で975科目(300科目増加)を実施しており、最終目標1,200科目の81%をクリアしている。例:デザイン・シンキング、イノベーション・プログラム等。

「5」入学定員の50%に相当する1,200人の学生を派遣 日本学生支援機構の「協定等に基づく日本人学生留学状況調査」で国立大学1位を5回(平成23-26,28年度)獲得している。令和元年度は、年間725人を派遣した。

「3」3,000人の留学生を受入れ ショート・プログラムを本格化し、4ヶ月のプログラムや2週間から1年のプログラムを実現した。その結果、令和元年度は2,106人の留学生を受入れた。

「1」多様な入試で入学定員の10%=240人を選抜 英語検定試験のスコアを利用した入試、韓国・台湾・中国での入試、AO入試等の特別選抜枠を拡充しており、最終目標値全学240人をクリアしている。

以上のように、事業開始以来6年が経過し、その成果は予想以上に大きく、全国のモデルとなるようなプログラムをいくつか推進している。今後も継続的に展開することでグローバル人材の育成を推進する。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ】

●令和2年度「ENGINEプラン＝全員留学」の開始

本ENGINEプランは、これまでの全てのグッドプラクティスが結実し、実施するものである。以下のような大きく3つの成果をもとに、全学でENGINEプランを実施し、新たな千葉大学の時代を切り開く。

■成果1「留学110%の国際教養学部」 → ENGINEプラン1「学部・大学院の全員留学」

<成果1> 平成28年度に本事業の最たる目標としての「国際教養学部」の設置を行った。この国際教養学部は、全員が留学する学部である。第一期生が卒業した令和2年3月までに、393名が31の国・地域に留学している。在学中1回の留学であれば、年間90名が留学すれば良いことになる。それに対して4年間で393名という数字は、**約110%の留学**である。多くの学生が2回以上の留学を行っており、2週間程度のショート・プログラムと、2ヶ月～1年の留学の組み合わせで留学をしている。なお、全学でも、平成23-26,28年度は国立大学1位、平成27,30年度は国立大学2位の派遣学生数を維持している。平成30年度の派遣学生数は843名であった。

<ENGINEプラン1> 令和2年度の入学生より全員留学を実施する。これは学部及び大学院の両方で実施するプログラムである。学生には最低2週間以上、2単位以上を修得する留学を課し、さらに2回目以降の長期留学も積極的に推進する。全学生に留学を必修化する理由は、3つある。1つ目は、留学前(入学前)の「学生のグローバル化への姿勢を変える」ため、2つ目は、留学中(入学後)の「多様な価値観を体験する」ため、3つ目は、留学後(卒業後)の「幅広い視点を持って問題を解決する」人材を育成するためである。

■成果2「イングリッシュコミュニケーション200%」 → ENGINEプラン2「英語教育の必修単位2倍」

<成果2> イングリッシュコミュニケーションは、平成23年度の開始以来、現在全てのキャンパスで30プログラムを実施している。当初想定していた受講学生は450名であったが、現在はその倍以上の学生である1,000人以上が受講している。現在は受講制限を実施しているほど学生の需要は高い。この学生の要望を受けて、学部3、4年次の専門課程において、国際学会での発表を前提とした、英語によるプレゼンテーションやディスカッションを中心とした授業を実施している。また、生命科学では、大学院生向けの高度な英語プレゼンテーションに関する授業も実施している。

<ENGINEプラン2> これらの成果をもとに、令和2年度より英語教育の必修単位を2倍にするプログラムの改革を決定した。改革の内容は3つあり、(1)英語教育完全能力段階別クラス編成教育の実施—プレイメントテストにより5段階のクラス編成を実施するとともに、同一のカリキュラム、同一テキストによる授業を実施する。(2)25%の英語授業を専門科目として実施—これまでの成果をもとに、専門科目において英語で実施する授業を開講する。この授業は英語で専門を学ぶだけでなく、コミュニケーション能力の向上を目指したものであり、全ての学部で実施する。(3)外国人教員3倍増による教育体制の整備—これまで進めてきたイングリッシュコミュニケーションは、ブリティッシュ・カウンシルに全てを委託していた。これを最終的には内部で実施するために、外国人教員3倍増による教育体制の整備を実施する。これらの教員はイングリッシュ・ハウスに属し、これまで、単位外であったイングリッシュ・ハウスにおける授業、個別指導や集中講座も卒業要件の単位として認める。

■成果3「スマートラーニング50科目」 → ENGINEプラン3「1,500科目スマートラーニング化へ向けて」

<成果3> 千葉大学では、本事業及び機能強化戦略の実施計画においてスマートラーニングを展開している。スマートラーニングとは、いつでも、どこでも学習できるというものであり、大学の授業そのものを改革していくものである。加えて、グローバル教育や留学先での学びを保証するものでもあり、これまでの2年間で、50のプログラムを構築した。中でも、全学必修である国際日本学や数理・データサイエンス科目は、これまでのメディア・コンテンツを利用して実施することができた。このうちの8科目は、米国の大学と実施しているCOIL型の共同学修科目である。

<ENGINEプラン3> 千葉大学のスマートラーニングは、1/3をメディア・コンテンツによる学習、1/3をディスカッションやプレゼンテーションを中心としたオンラインによる対面学習、1/3を教員との個別学習やTAとのチュートリアルで構成するものである。現在50ある科目を3年以内に120科目に増加させる。さらに最終的には、必修科目を優先させて1,500科目をスマートラーニング科目にする。また、これらの授業は、スマートオフィスで管理運営し、バンコクをはじめとする海外キャンパスで、協定校の学生にオフショア・プログラムとして提供する。

千葉大学グローバル人材育成 “ENGINE”



図1 SGUから展開した全員留学ENGINEプラン